

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372900722		
法人名	有限会社 やすらぎの里		
事業所名	グループホーム やすらぎの里(有明海)		
所在地	熊本県八代郡氷川町鹿島943番地		
自己評価作成日	平成26年8月31日	評価結果市町村受理日	平成26年11月4日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成26年9月12日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

玄関を出ると目の前には広い田んぼが広がり、遠くには九州山脈が見渡せるのどかな田園風景が広がっています。自然豊かな環境の中にやすらぎの里はあります。町内には桜の名所があり、桜の花と同じ時期に氷川町特産の梨の花も咲くので、花見弁当を持って両方の花の花見に出かけます。花の下での記念写真には皆さんの笑顔があふれています。また紫陽花、コスモスの見学にも出かけます。ホームでは本人の希望や要望を確認しながら、自分の生活リズムで安心して過ごしていただけるよう支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者・家族にとって、『やすらぎの里』となるよう、法人の機能を活かしながら開所時からの理念5項目の実践に努めている。管理者は「本人が何をしたいのかを考えて支援することの大切さ」を、日々指導しており、その定着度が入居者の表情や家族の言葉からも感じることができるようになったと語っている。前回の外部評価結果を受け、職員間で検討を行い災害対策の強化や、室内環境への配慮など改善できることに早急に取り組む真摯な姿勢は大いに評価できるものである。また、「今いる入居者が元気で長生きしてもらえるような支援」の充実に努め、帰宅が困難になった入居者の白寿祝いの場所にホーム会議室を提供するなど、入居者・家族の喜びをホーム全体でサポートしている。運営推進会議という名称を初回の開催から『ざっくばらんの会議』として行うなど、構想豊かな施設長や経験と実践力を大切にする管理者のリーダーシップの元、今後のホームの更なる展開に期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者と職員は理念に基づき、話し合いをしながら日々実践に繋げているが、理念の5番目の項目が実践に繋がっていない。	開所時に作られた五つの基本理念について、他方向から見た見直しの必要性も考えたが、まずは職員への更なる浸透と実践に努めていく事として継続されている。理念は誰もが目にすることができるよう、玄関先に掲示し、共有や啓発に繋げている。管理者は、理念の中の一つ『地域との共存共栄』が特に、今後も課題として努力していきたいと語っている。	今後は理念の実践に繋がるような、サブ理念や月目標などを全職員で検討し、地域の中の事業所として地域への理解や入居者サービスの向上に反映されていくことに期待が持たれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に入会しておらず隣近所も離れているため積極的な交流は行っていない。地区のいきいきサロンに管理者が参加した時等に里への訪問等お願いしているが、地域性なのかどなたも訪問されることは無い。	地域の情報は推進会議の中で包括職員や地域代表者から得ることが多いのが現状である。管理者はホームへの理解や来訪に繋がるような働きかけに努めており、今年初めてフラダンスボランティアの訪問が実現しており、入居者の笑顔を引き出す交流が展開されている。	ホームは管理者を中心に認知症サポーター養成講座への協力にも努めている。今後は保育園児との交流の機会や小・中学生の職場体験などの受け入れを行うことで、地域貢献や認知症を含め福祉への正しい理解を学生に伝えて頂きたい。このことがホーム理念の浸透に繋がっていくと思われる。取り組みに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトの一員として地域の「認知症サポーター養成講座」で認知症についての理解や支援を行っている。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎月の職員会議のまとめや行事等について書面に基いて報告し、意見やアドバイスをもらい、サービスの向上に繋げている。	民生委員の経験のある地域代表者や家族代表者、包括職員などの参加により、適宜会の趣旨を伝えながら二ヶ月ごとの定期開催が実現している。包括職員より役場職員も参加をしてはどうか？との意見を受け、管理者は働きかけを行っている。また、家族にも会の説明を行い、参加を依頼している。会の中ではホームの近況や職員会議の他、研修報告では資料を配布し(口腔ケア・利用者の権利など)、ミニ講座を開くなどホームの取り組みを積極的に発信している。	運営推進会議という少々堅苦しい会の名前を和らげるために、施設長は初回から『ざっくばらん委員会』と命名しこれまでに至っている。この先駆的な取り組みが大いに反映されるためにも、幅広い参加メンバー構成に期待がもたれる。また、記録方法(どの方が発言された内容か等)や、家族への議事録の共有方法についても検討頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	業務内容等でわからないことがあると市町村の担当者に聞いて教えてもらっている。研修会の案内等をメールや電話でもらって参加している。	行政の担当者とは相談事項があれば、その都度電話や役所を訪れ指導やアドバイスを受けホーム運営に活かしている。内容によっては行政と合わせ福祉事務所へも相談を行い対応が検討されている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内での勉強会、外部での勉強会には積極的に参加している。職員全員が身体拘束をしないケアの方法をその都度考え実践している。	ホーム内の研修や外部研修会に参加した職員による復講を行う他、言葉による拘束や入居者のケアについて施設長は気づいた点をその都度指導している。日中はホームの玄関はオープンであり、見守り支援について日頃から共有に努めている。夜間のベッド柵使用について報告があった際は、早急に勉強会を開催し、共通理解の徹底が行われた。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内勉強会や外部研修で虐待防止を学んでいる。朝の申し送り時の報告やその都度の話し合いで虐待が見過ごされないように努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修会や職員会議で学んでいる。相談のあった家族には制度の説明を行い、役場の担当者に相談されるよう繋げている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に契約書と重要事項説明書の内容について説明している。質問があった時は、納得されるまで丁寧に説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時には家族の要望などを積極的に聞くよう心掛けている。面会簿に要望や家族の気持ちを書いてあるときは要望や気持ちに添えるよう職員間で話し合っ解決できるようにしている。	発語が困難になられた入居者もあり、寄り添いや細かい観察の中で本人の要望を把握していくように指導が行われている。また、家族が来訪しやすい雰囲気心がけ、もし面会時間が遅くなっても安心してインターホンをならし訪問して欲しいことを伝えている。管理者は家族は言葉に出して意見や不満などを言われなくても、職員は決して自身のケアに満足することなく、日々真摯に利用者・家族に向き合うことが重要であり指導に努めたいと語っている。	面会記録用紙には意見や要望欄も設けられているが、決して家族の負担にならないような配慮のもと行われている。今後もこのような細やかな対応が利用者・家族サービスの向上に繋がっていくと思われる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が自分の意見を遠慮なく話せるような職場の雰囲気づくりを心掛けており、提案されたことに対しては十分検討するようにしている。	管理者は会議の席に限らず、普段から職員の意見や要望の出しやすい環境に努め、共にケアにあたりながら確認を行っている。介護記録の記入の仕方について相談を受けた際も、ケアマネジャーとしての経験も活かしながらわかりやすい回答を行い、本人のやる気を育てるような指導が図られている。また、勤務体制や手当など施設長と連携を図りながらやりがいのある職場環境が整備されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与に関しては評価システムに基づき評価されてきている。また定期昇給に関しても向上心を持ち、努力している人が評価がされる環境になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員は積極的に研修会に参加し、研修会の内容を職員会議の時に職員間で共有できるようにしている。資格取得に対して機会を設けてもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月に1回程度、同業者と交流する機会があり、その都度介護の仕方など相談や意見を出し合うようにしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今までの生活と環境が変わりどのような不安を抱えておられるのか、これからどのように生活していきたのか、ゆっくり、しっかり話を聞き安心して生活ができるように心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っていること、不安に思っていること、要望することを十分に聞き、職員間で情報を共有し、家族との関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族から十分に話を聞き、得られた情報をもとに本人の思いに沿った支援が提供できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族の立場に立ち、親しい信頼関係を築き、日々の生活を共に共感、支えあう関係づくりを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会に来られた時は本人の家での生活ぶりを聞いて本人のことを理解するように努め、また施設での様子を詳しく説明し、家族とともに介護しているという関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会に来られた方には、また訪問していただけるようお願いしている。お店や郵便局、お寺など馴染みの場所へ出向いている。、	入居者にとって大切な家族や知人との縁が途切れないよう、いつでも気軽に来訪してもらえるようホームの雰囲気作りに取り組んでいる。娘さんによる定期的なカット支援、親戚が集まる時に合わせての帰省を希望された家族、馴染みの商店利用などそれぞれに応じ支援されている。米寿祝いでは帰省されたが、90歳の卒寿祝いでの帰省は困難になられホームの会議室を開放し祝いの会が行われ、家族・親類と楽しいひと時を過ごされたようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員から話題提供し、入居者同士のコミュニケーションの橋渡しをしたりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族の相談に乗ったりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話などにより情報収集し、どのような暮らしを望んでおられるのか考え支援している。また自らの表現が困難な場合も普段の様子や表情から本人本位の検討を行っている。	日々の関わりの中でその方の思いを把握し、全職員で共有を図ることとしている。ホームの年月と共に高齢化から発語が困難になられ思いだけでなく、痛みや苦痛を訴えるのも難しくなられた方も多くなっている現状である。だからこそ、常に細かい観察、その後の対応が重要になってくると管理者は語っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族との会話で生活歴を把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の体調・気分はその都度違うため、表情、動き、言動の観察に努め、バイタルチェックや食事の摂取量、排泄状況に注意し体調の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族との話し合いをもとに本人がより良く暮らせるような介護計画を作成し、3か月ごとに担当職員がモニタリングを行っている。計画が現状に合わなくなったときは計画の変更を行っている。	定期的なモニタリングやサービス担当者会議を、職員会議の中で開催することで、多くの職員の気づきや提案が活かされたプランとなっている。また、作成担当者は、職員が手をかけ過ぎることで、本人の力をなくしてしまうため、見守りや必要な支援を見極めたプラン作成に努めている。家族へ説明を行う際は、わかりやすい言葉を心がけることと、たとえ問題行動であっても、その行動が悪いばかりではなく、意思表示をされた事はいいことであることも伝えるなど、担当者は双方の思いを汲み取り、経験を活かしたものとなってい	昨年度からケアマネジャーや介護福祉士資格など専門性や経験を得た職員が入職していることは心強いものである。管理者と連携し、今後も入居者に最良の支援が実践できるホームとしての取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録を記入することで職員間で情報を共有している。その時の状況に応じた介護を実践している。しかしまだ細かい気づきなど記入されていないこともあるので記入漏れが無いよう努力が必要		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	買い物など今まで要望が無かったが、本人の希望で買い物支援をするようになった。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや病院、役場など必要などところとの繋がりはあるがそのほかの資源との繋がり希薄である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に今までのかかりつけ医を継続できること、施設の協力医に変更できることを説明し、本人や家族に決めてもらっている。整形外科、皮膚科、眼科、泌尿器科、精神科等への受診の支援も行っている。	入居前からのかかりつけ医を引き続き支援しながら本人、家族の希望があれば協力医への移行に応じている。受診には家族の協力もあるが、高齢化が進みリフト車による送迎に頼る所も大きく、職員が同行する機会が多いようである。協力医とは電話で相談にのってもらい、何かあれば業務終了後でもホームにかけつけてもらう等、細やかな連携がとれており、家族への伝達もスムーズに行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師がいないので、かかりつけ医に電話で相談したり、定期受信時に日常の様子を伝えるようにしている。状態変化があった場合は併設の特養の看護師に相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院に情報提供を行い、本人のストレスや不安が軽減できるようにしている。馴染みの顔を見られると安心されるので、入院時は毎日、あるいは1日おきに職員が病院訪問している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族に、終末期に施設でできる支援の範囲を詳しく説明している。	入居時には指針を基に重度化した場合や終末期ケアについて家族に説明している。その後の入居者の状態をみながら必要と思われる時点で更にふみこんで話し合い、本人・家族の希望をもとに契約書を交わしている。管理者は日ごろから見極めが大事であるとして、職員の普段の観察力を重要視しており、何かあれば協力医と直ぐに連絡できる体制をとっている。本年も家族の協力を得てホームでの支援が行われている。	これまでにホームでの看取り支援を数例経験しており、支援後の勉強会の機会や家族の声を今後活かすなどの対応を期待したいところである。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	避難訓練は行っているが、応急手当などの訓練は行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の避難訓練は年2回昼と夜に行っている。それ以外の災害時の訓練は行っていない。災害の時避難場所まで安全に移動できるか、机上での訓練をしなければならないと思う。	年二回昼、夜の火災訓練を実施している。緊急避難場所の確保や日々の安全チェックに努め、職員の意識強化を図り、先ずは火を出さないことを念頭に置いている。地震や風水害等自然災害への対応は不十分だとしている。	備蓄を法人本体で管理しているものの、何がどのくらいあるかなど内容の把握はしておらず確認の必要があると思われる。また自然災害についても過去の事例を通し勉強会の開催に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人として接するよう心掛けている。目上の人たちなので言葉使いにも気を付けている。排泄の結果などを職員間で報告し合う時、他の利用者に聞こえないように心掛けている。	職員は入居者との関係が長年接してきた間柄であるからこそ、接遇については常に意識して対応するよう心がけている。特に呼称や声のトーンについては尊厳の気持ちを持って接し、声のかけ方や言葉の選択に互いに気を配っている。	管理者はつつい声が大きくなったり、言葉使いに違和感を感じたときにはその都度、注意を促し一緒に考える時間を持っている。今後も自己を振り返る研修の機会が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉を発せられない人に対してはつい職員の考えで介護してしまいがちになるので、話しかけにより本人の顔の表情や動作で本人の思いや希望を汲み取るように心掛けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	まだ職員の都合での生活になっている事があるが、生活意欲の低下している人、体調不良の人等その人なりのペースを大切に、どのように過ごしたいと思っているのか日頃の様子から思いを汲み取り本人の意向に沿った暮らしができるように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服を選ぶとき、季節に合った服を選ばれるよう支援している。こだわりの服を優先的に選んでもらっているが、季節外れの服にならないよう、着過ぎにならないよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	穏やかな雰囲気ですることができるよう席の配置を考慮している。一人一人の状態に合わせた食事形態を提供している。食事の片付けができる人と一緒に片づけを行っている。	法人栄養士の立てた献立を同厨房で調理しているが、炊飯だけはホームで行い広いリビングに香りが漂い入居者の食欲を駆り立てている。直接調理に関する機会が少ない為、時には入居者と手作りおやつを作ったり、ゴーヤ料理などを提供して食材に触れる場面を心がけている。年々介助や見守りの必要な方が増えてきており、職員は寄り添いながらゆっくり食べてもらうよう配慮している。	職員の検食については以前からの課題のようであるが、入居者と同じものを摂ることで気持ちを代弁し献立へも反映されるものと思われる。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事しやすい姿勢、食べやすい形状・量の食事を提供し、栄養や水分量の確保に努めている。呑み込みの悪い人に対しては、水分にとろみをつけ食べる感覚で摂取してもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きや口腔ケアを行っている。自分で磨くのが難しい人には口腔ケアティッシュ、歯ブラシ、舌ブラシ等その人に合った方法で支援し、肺炎予防などに努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼間は定期的にトイレでの排泄を支援している。定時以外にもトイレの訴えがあったらその都度誘導している。立位が難しい人には職員2人体制で行っている。	日中は声かけや誘導によりトイレでの自尿を促し、入居者の自信や清潔保持、排泄用品のコストダウンに繋げている。夜間帯に使用するポータブルトイレはその都度処理し、入居者が気持ちよく使える状態にしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	バランスの良い食事摂取や十分な水分補給を心掛けている。個々の排便チェックを行い下剤などを使用して便秘にならないように心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週に2回入浴日を決めているが、その時の気分で拒否された時は時間をずらしたり入浴日を変更して入ってもらうようにしている。その時の身体状況によって決まった日以外の入浴も行っている。毎日入浴できる体制はとっているが、希望される人はいない。	基本的に週二日の入浴を支援している。一人ひとりにゆっくりと入ってもらい、入居者の状態によっては二人介助で対応している。入浴は身体チェックのできる時間であり、皮膚の異常やケガ・むくみなど早期発見・対応に全職員で取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人の身体状況に合わせて午前、午後、それぞれ約1時間程度づつ居室にて休息を取ってもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者全員の薬の効能などの把握はできていないが、きちんと服薬できたかの確認は行っている。薬に増減があった時は朝の申し送り時に報告、確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家で行っていた洗濯物干しなどの家事を行ってもらうことで生きがいを持ってもらっている。また菓子を食することが楽しみな人には職員が菓子を保管し、量を調整しながら提供し食べる楽しみを持ってもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援の頻度は少ないが、買い物の支援や、車椅子で本人が希望される場所への支援を行っている。家族にも外出支援の協力をお願いしている。	外出の機会は多くはないが、桜や紫陽花・梨など季節の花見や地域の名所(立神峡など)見学に出かけている。個々の希望を聞き取り、1対1での買い物やホーム周辺の散歩など遠方でなくともじっくり関わる時間を大切にしている。間近に迫った法人の秋祭りには家族も参加し利用者と一緒に楽しいひと時を過ごされるようである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持されている人は僅かだが、持っていることで安心感を持たれている。病院受診時に自分の好きなものを選んで買い物をされる人や馴染みの店に飴玉などを買いに行かれる人等、希望通りの買い物ができるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に電話されるのを支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	館内は毎日掃除をして気持ちよく生活できるようにしている。空調も居心地の良い温度を提供している。庭には花を植えたり、夏場はグリーンカーテンを設けて季節感を味わってもらっている。	玄関には広報誌にも掲載される入居者の活動写真が拡大して掲示され、笑顔の入居者やサポートする職員の優しい表情が印象的である。一日の殆どを過ごすリビングホールは、それぞれのユニットの間に設けられ、ソファの一角を自分の居場所として過ごされる方や、職員と談笑する姿が確認された。月日を経てもトイレや洗面台などの共有部分は清潔に管理され気持ちよく使用されている。また、豊かに実った稲穂など季節を味わうことができる環境は何よりのホームの特徴である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファの場所を工夫して気の合った人同士が会話を楽しんだり、くつろいで座ったり、一人でゆっくり過ごせる場所等を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は一人でゆっくり過ごせる空間なので、家で見ていた自分で操作できる使い慣れたテレビを置いたり、使い慣れたクッション等を配置することで家での生活に近い環境づくりを心掛けている。	それぞれの居室は、「たい」や「ひらめ」をはじめ、有明や玄海の海の名に因み、全てに魚の名前がつけられている。広さも十分な木目を生かした部屋は、家族の協力により、馴染みの品の持ち込みの他、職員の工夫によって写真やカレンダーが掲示されている。居室によっては持ち込みの品が少なく、少々寂しくもあることから、管理者は引き続き持ち込みの必要性を家族に啓発していきたい意向である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	通路には歩行の妨げになるようなものを置かないようにしている。トイレの場所がわかるように大きな字で表示したり、自分の居室がわかるようにドアに名前を書いた用紙を張り付けている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372900722		
法人名	有限会社 やすらぎの里		
事業所名	グループホーム やすらぎの里(玄海灘)		
所在地	熊本県八代郡氷川町鹿島943番地		
自己評価作成日	平成26年8月31日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成26年9月12日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>玄関を出ると目の前には広い田んぼが広がり、遠くには九州山脈が見渡せるのどかな田園風景が広がっています。自然豊かな環境の中にやすらぎの里はあります。 町内には桜の名所があり、桜の花と同じ時季に氷川町特産の梨の花も咲くので、花見弁当を持って両方の花の花見に出かけます。花の下での記念写真には皆さんの笑顔があふれています。また紫陽花、コスモスの見学にも出かけます。ホームでは本人の希望や要望を確認しながら、自分の生活リズムで安心して過ごしていただけるよう支援しています。</p>

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p> </p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

事業所名:

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者と職員は理念に基づき、話し合いをしながら日々実践に繋げているが、理念の5番目の項目が実践に繋がっていない。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に入会しておらず隣近所も離れているため積極的な交流は行っていない。地区のいきいきサロンに管理者が参加した時等に里への訪問等お願いしているが、地域性なのかどなたも訪問されることは無い。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	キャラバンメイトの一員として地域の「認知症サポーター養成講座」で認知症についての理解や支援を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎月の職員会議のまとめや行事等について書面に基づいて報告し、意見やアドバイスをもらい、サービスの向上に繋げている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	業務内容等でわからないことがあると市町村の担当者に聞いて教えてもらっている。研修会の案内等をメールや電話でもらって参加している。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	施設内での勉強会、外部での勉強会には積極的に参加している。職員全員が身体拘束をしないケアの方法をその都度考え実践している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内勉強会や外部研修で虐待防止を学んでいる。朝の申し送り時の報告やその都度の話し合いで虐待が見過ごされないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修会や職員会議で学んでいる。相談のあった家族には制度の説明を行い、役場の担当者に相談されるよう繋げている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に契約書と重要事項説明書の内容について説明している。質問があった時は、納得されるまで丁寧に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時には家族の要望などを積極的に聞くよう心掛けている。面会簿に要望や家族の気持ちが書いてあるときは要望や気持ちに添えるよう職員間で話し合っ解決できるようにしている。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員が自分の意見を遠慮なく話せるような職場の雰囲気づくりを心掛けており、提案されたことに対しては十分検討するようにしている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与に関しては評価システムに基づき評価されてきている。また定期昇給に関しても向上心を持ち、努力している人が評価がされる環境になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員は積極的に研修会に参加し、研修会の内容を職員会議の時に職員間で共有できるようにしている。資格取得に対して機会を設けてもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月に1回程度、同業者と交流する機会があり、その都度介護の仕方など相談や意見を出し合うようにしている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今までの生活と環境が変わりどのような不安を抱えておられるのか、これからどのように生活していきたくのか、ゆっくり、しっかり話を聞き安心して生活ができるように心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っていること、不安に思っていること、要望することを十分に聞き、職員間で情報を共有し、家族との関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族から十分に話を聞き、得られた情報をもとに本人の思いに沿った支援が提供できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族の立場に立ち、親しい信頼関係を築き、日々の生活を共に共感、支えあう関係づくりを心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会に来られた時は本人の家での生活ぶりを聞いて本人のことを理解するように努め、また施設での様子を詳しく説明し、家族とともに介護しているという関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会に来られた方には、また訪問していただけようお願いしている。お店や郵便局、お寺など馴染みの場所へ出向いている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員から話題提供し、入居者同士のコミュニケーションの橋渡しをしたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族の相談に乗ったりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話などにより情報収集し、どのような暮らしを望んでおられるのか考え支援している。また自らの表現が困難な場合も普段の様子や表情から本人本位の検討を行っている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話や家族との会話で生活歴を把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の体調・気分はその都度違うため、表情、動き、言動の観察に努め、バイタルチェックや食事の摂取量、排泄状況に注意し体調の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族との話し合いをもとに本人がより良く暮らせるような介護計画を作成し、3か月ごとに担当職員がモニタリングを行っている。計画が現状に合わなくなったときは計画の変更を行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録を記入することで職員間で情報を共有している。その時の状況に応じた介護を実践している。しかしまだ細かい気づきなど記入されていないこともあるので記入漏れが無いよう努力が必要		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	買い物など今まで要望が無かったが、本人の希望で買い物支援をするようになった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターや病院、役場など必要などとの繋がりはあるがそのほかの資源との繋がり希薄である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に今までのかかりつけ医を継続できること、施設の協力医に変更できることを説明し、本人や家族に決めてもらっている。整形外科、皮膚科、眼科、泌尿器科、精神科等への受診の支援も行っている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師がいないので、かかりつけ医に電話で相談したり、定期受信時に日常の様子を伝えるようにしている。状態変化があった場合は併設の特養の看護師に相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は病院に情報提供を行い、本人のストレスや不安が軽減できるようにしている。馴染みの顔を見られると安心されるので、入院時は毎日、あるいは1日おきに職員が病院訪問している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族に、終末期に施設でできる支援の範囲を詳しく説明している。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	避難訓練は行っているが、応急手当などの訓練は行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の避難訓練は年2回昼と夜に行っている。それ以外の災害時の訓練は行っていない。災害の時避難場所まで安全に移動できるか、机上での訓練をしなければならないと思う。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人の人として接するよう心掛けている。目上の人たちなので言葉使いにも気を付けている。排泄の結果などを職員間で報告し合う時、他の利用者に聞こえないように心掛けている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	言葉を発せられない人に対してはつい職員の考えで介護してしまいがちになるので、話しかけにより本人の顔の表情や動作で本人の思いや希望を汲み取るように心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	まだ職員の都合での生活になっている事があるが、生活意欲の低下している人、体調不良の人等その人なりのペースを大切に、どのように過ごしたいと思っているのか日頃の様子から思いを汲み取り本人の意向に沿った暮らしができるように努力している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服を選ぶとき、季節に合った服を選ばれるよう支援している。こだわりの服を優先的に選んでもらっているが、季節外れの服にならないよう、着過ぎにならないよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	穏やかな雰囲気ですり食事ができるような席の配置を考慮している。一人一人の状態に合わせた食事形態を提供している。食事の片付けができる人と一緒に片づけを行っている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事しやすい姿勢、食べやすい形状・量の食事を提供し、栄養や水分量の確保に努めている。呑み込みの悪い人に対しては、水分にとろみをつけ食べる感覚で摂取してもらっている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きや口腔ケアを行っている。自分で磨くのが難しい人には口腔ケアティッシュ、歯ブラシ、舌ブラシ等その人に合った方法で支援し、肺炎予防などに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼間は定期的にトイレでの排泄を支援している。定時以外にもトイレの訴えがあったりその都度誘導している。立位が難しい人には職員2人体制で行っている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	バランスの良い食事摂取や十分な水分補給を心掛けている。個々の排便チェックを行い下剤などを使用して便秘にならないように心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週に2回入浴日を決めているが、その時の気分で拒否された時は時間をずらしたり入浴日を変更して入ってもらうようにしている。その時の身体状況によって決まった日以外の入浴も行っている。毎日入浴できる体制はとっているが、希望される人はいない。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人の身体状況に合わせて午前、午後、それぞれ約1時間程度づつ居室にて休息を取ってもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者全員の薬の効能などの把握はできていないが、きちんと服薬できたかの確認は行っている。薬に増減があった時は朝の申し送り時に報告、確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家で行っていた洗濯物干しなどの家事を行ってもらうことで生きがいを持ってもらっている。また菓子を食することが楽しみな人には職員が菓子を保管し、量を調整しながら提供し食べる楽しみを持ってもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出支援の頻度は少ないが、買い物の支援や、車椅子で本人が希望される場所への支援を行っている。家族にも外出支援の協力をお願いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持されている人は僅かだが、持っていることで安心感を持たれている。病院受診時に自分の好きなものを選んで買い物をする人や馴染みの店に飴玉などを買いに行かれる人等、希望通りの買い物ができるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に電話されるのを支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	館内は毎日掃除をして気持ちよく生活できるようにしている。空調も居心地の良い温度を提供している。庭には花を植えたり、夏場はグリーンカーテンを設けて季節感を味わってもらっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファの場所を工夫して気の合った人同士が会話を楽しんだり、くつろいで座ったり、一人でゆっくり過ごせる場所等を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は一人でゆっくり過ごせる空間なので、家で見ている自分で操作できる使い慣れたテレビを置いたり、使い慣れたクッション等を配置することで家での生活に近い環境づくりを心掛けている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	通路には歩行の妨げになるようなものを置かないようにしている。トイレの場所がわかるように大きな字で表示したり、自分の居室がわかるようにドアに名前を書いた用紙を張り付けている。		